

「平和国塊」の「100年人生」

「初の「三世代平等社会」を達成」

堀内正範 元『知恵蔵』編集長

(筆名 堀 亜起良 東洋哲学者)

おわりに 平和100年と人生100年

天寿を全うする「寿終正寝」

小さな水玉模様のような「尊厳」人生

歴史遡行2000年の旅

暮年を支える指針「老中八策」

天寿を全うする「寿終正寝」

本稿も「おわりに」に到達いたしました。いつかはだれにも訪れる寿終のとき。そのときがいつかはだれにもわかりません。それゆえに「天寿」といいます。

天寿は古来、「上寿」が百二十歳、「中寿」が百歳、「下寿」が八十歳（孔穎達等『正義』など）といわれてきました。「下寿」ですらなかなか届かないのが実人生でしたが、

いまや八〇歳が平均寿命となり、「中寿」の百歳が本稿のめざす「一〇〇年人生」ですから、人寿が天寿にやっと届いた稀有の時代といえるのでしょう。

ひとりでやっとたどり着いたのに、「あれよあれよ」という間に通りすぎてしまう「百歳の過客」としてではなく、長寿化を成し遂げたわが国の高齢者が、みんなで初代としての「一〇〇年人生」の社会をみんなで実現することになるでしょう。一〇〇歳以上の女性が七万人で男性が一人(二〇一二年九月)、このまま進みますと、初期の「一〇〇歳社会」は女性中心の姿になることが想定されますが。

「平和団塊」のみなさんはいま「古希期」にあります。四半世紀先の寿終の時をどういう姿で迎えるかは個人的な願いはあっても希望どおりにできるかはわかりませんが、「寿終正寝」ということばは傍らに置いておいてもいいでしょう。

高齢期をおだやかに住み慣れた自宅・地域で過ごして、自己目標を歩一歩実現しながら円熟期を送って、天寿を全うすること。為すべきことをほぼ成し終えて、住み慣れた家で、部屋で、床で、親しかった人びとに囲まれて、再会(輪廻)を伝えて、眠るように命終える姿(涅槃)をいいます。

一生の終わりの「寿終正寝」は、みんなが願ってみんなで実現したい情景です。

東洋のふたりの哲人の最期の情景が想い浮かびます。

インドの釈迦牟尼(仏陀ゴータマ・シッタールタ)は八〇歳のとき、教えを説いて

いた王舎城の鷲の峰（靈鷲山）を出て生地ふるさとのルンビニーへむかいます。その旅の途中、ごちそうになったキノコにあたって体力を消耗し、クシナーラーで「涅槃」のときを察して沙羅双樹の元に床をしつらえさせ、同行者だったとこの阿難（アーナンダ）や修行者たちに囲まれて、「転生（輪廻）」を伝えて生命の実相を明かしていきます。

中国の孔子（孔丘）は、弟子たちを伴った長期の中原周遊の旅（温故知新）から郷里曲阜にもどって、著作と教学に努めて数年、七四歳のとき、「太山壊れんか、梁柱摧けんか、哲人萎えんか」（『史記「孔子世家」』から）と死期を察して詠じています。顔回に先立たれたとき、「天」はわれを滅ぼせりと嘆いた至聖の人は、弟子たちに囲まれて去世しています。「哲人其萎」の姿です。

本稿の「おわりに」を迎えるに当たって、まず二〇一七年七月一八日、一〇五歳九カ月で「寿終正寝」の姿を示して亡くなった日野原重明博士が思われます。三月末に延命治療を受けずに聖路加病院を退院して自宅で診察を受けながら養生していました。が、家族に見守られる中で呼吸機能が次第に低下して静かに亡くなられたといえます。

「望ましい生き方と人生の終え方を提案して、それを実践した生を終えられました」（福井次矢聖路加病院院長）ということ。ここでいう「寿終正寝」の姿です。

去世してなおその姿が偲ばれる数多くの人びとのうち、こころざしを「芸の道一筋」

にして命の限りを測りながら生きた姿をみんなで共有している人として高倉健さんと蜷川幸雄さんが合わせて思い出されます。

その第一の「加齢が価値でありつづける人生」で華麗に古希を迎えた吉永小百合さんに登場いただいたので、ここでは健さんの姿を思い出しながら偲んでおきましょう。

俳優高倉健（小田剛一）さんは二〇一四年一月一〇日に亡くなりました。

そのときは「尖閣」領有問題や「政冷経冷」までいわれて日本ざらいがすすんでいた中国でも、「文温」としての絆を素直に表わしたニュースとして広がり、大地から湧きあがるように硬漢高倉健の去世は全土で惜しまれました。かつて文革のあったあと、一九七八年に中国で最初に上映された外国映画が「君よ憤怒の河を渉れ」（中国名は「追捕」）であり、その主演者としてよく知られていたからでした。

温家宝前首相は「追捕」はもちろん、「三丁目の夕日」（「永遠的三丁目的夕陽」）や「おくりびと」（「入殮師」）をみて、戦後日本の大衆の暮らしや共有する死生観を映画から理解していたといえます。

その後も中国では高倉健主演の「幸福の黄色いハンカチ」（「幸福的黄手帕」）や「遙かなる山の呼び声」（「遠山的呼唤」）が上映され、二〇〇五年には張芸謀監督による合作映画「単騎、千里を走る」（「千里走単騎」）が撮影されています。

張監督は、その公開にあたって、高倉さんは眼ではなく心で泣く（心在哭泣）演技

者だったと紹介しています。

二〇一三年の文化勲章受章のときに、高倉さんにはすでに症候が現われていたといえます。式後の「日本人に生まれて本当によかった」ということばは、静かに実感をもって離世の思いを伝えていました。

「往く道は精進にして、忍びて終わり悔いなし」

は、高倉さんが数多く演じた任侠に生きる男の「忍辱負重」（辱めを忍んで重責を負う）を生き抜いた人生を思わせます。

「おしん」がそうであったように、健さんは自分が演じた「忍辱負重」の人物が、いまの日本の人びとばかりではなく、東アジアの途上国で苦勞して暮らしている人びとを励ます人間像であることを知っていたからでしょう。アジア共有の国際的俳優だったのです。

「不器用ですから・・どうぞお幸せに」（コマーシャル）と
いって去っていくうしろ姿を残して。健さん、現世で演じな
かった幸福いっぱい（幸福開心）の人間を、ぜひ天堂で演じ
てください。おつかれさまでした。享年八三歳。

「一以貫之」、天寿を全うした健さんをここに記しておきま
しょう。



* 「自己実現」と円熟エンディング

みなさんのだれにでもできることに「自己実現」があります。

「自己実現」は国連の「高齢者五原則」のひとつです。「技術」の奥義を極めた「人間国宝」（重要無形文化財保持認定者）や「伝統工芸の匠」や華道・茶道の家元といった一芸を磨いて保持する人びとはいうまでもありません。が、高齢者のだれもがみずからもつ技術を活かして、他の高齢者が喜んで用いてくれる優れモノを制作すること。また「知識」のほうでは専門分野にかかわりなく、楽しみながら保持する知識を活かして制作品に仕上げることに。そういう作者本人しか知らない制作品群が、わが文化脈列島ジパングの原石を輝かせているのです。

一人ひとりが選んで過ごしてきた新世紀の二〇年。一人ひとりが努めて得た成果は、平和の証として厚い層となって存在しています。「自己実現」にいそしんで「天寿」を全うすることの総体が「平和国家日本」の先進性として、高齢化途上国の人びとの羨望するモデル事例となるにちがいありません。

小さな水玉模様のような「尊厳」人生

そしてわたしにもできること。

毎夜、横になって静かに心音を確かめて眠りにつきます。

きょうのさまざまな出会いを思い返して親しんで、あすの出会いに繋ぐために、そつと胸に掌を押し当てて心音をさぐります。

たしかに不静脈はありますが、激励も感謝も受けずに刻みつづけてきた頼もしいリズムには、今夜も変わりがありません。

世紀の目標としてめざした戦後平和の一世紀、二〇四五年まであと四半世紀・・・。小さな水玉模様のような人生をみんなで重ね合わせて一年復一年、同時代に生を受けた親しい人と時に別れを告げながら日復一日を確かめて過ごすこと。その総和がまた国際的な信頼を引き継ぐ「日本高齢社会」となることを確信していいのではないのでしょうか。

高齢者みんなが等しく指針としているのが国連の「高齢者五原則」（一九九一年・第四六回国連総会で採択）です。一つひとつをもう一度、確認しておきましょう。

「自立」「参加」「ケア」「自己実現」「尊厳」

の五つです。その最後の項目に「尊厳」が据えられています。優れた先人に感謝をいたします。ここでは個人としての小さな水玉模様のような人生の日々を重ねて円熟エンディングである「寿終正寝」のときまで送りつづけること。この国の新たな歴史に連なることをひそかな誇りとして確認しつつ過ごすこと。

歴史廻行二〇〇〇年の旅

人生にひとつだけこんな特別な旅行をしました。

五五歳で、そのころはめずらしかった「早期自主退社」をして、欧米の都市にではなく中国中原の古都「洛陽」に出奔したのでした。一九九四年の秋のこと。

洛陽はご存じのように、倭の奴国王の遣い（五七年）や女王卑弥呼の遣い（二三八年）が朝貢におとずれた王都。日中交流の原点ともいべき土中（国の中心）の地です。ですから心の内では平成の遣唐使の意気込みで、二〇〇〇年の歴史廻行の旅に出たのでした。

新世紀とともに迎える還暦。その後三〇年の高齢人生をどう過ごすかという漠としたテーマ探しかかわってはいましたが、三年の滞在を終えて「洛邑土中」の地から帰ったあとも、何を？ と問われてなお漠とした答えしかありませんでした。

そして世紀末に還暦とともに迎えたのが、一九九九年の「国際高齢者年」でした。目の前に綺羅星のように輝いている高齢先輩となすべき事業、平和の証である「日本高齢社会」形成への参画がひとつの目標として明らかになりました。それと同時にもうひとつ、平和裏での「アジアの共生」（モノの豊かさの実現）と政冷・経冷の中での「文温」としての日中文化交流でした。

このふたつの事業は国際的に注目されるわが国の役割であり、平和裏になすべきその活動にひとりの体现者として参画するというのが、確とした自己実現の目標となったのでした。中国中原「洛邑土中」で見定めた温故二〇〇〇年と新聞社での知新一〇〇年は少なからずここに活かされています。（『頑張って生きよう！ ご同輩』高連協編 二〇一二年一月二〇日・博文館新社より）

* 戦火と赤い兔の目の記憶

灯火管制の下で。

昭和一三（一九三八）年の暮れ近くに東京渋谷区のひとつ隅で生まれました。

子どもの目に焼きついた戦争の鮮明な光景があります。昭和一九（一九四四）年のその夜、灯火管制でうす暗い家の中が急にざわめいて、大人たちみんなが二階にあり、物干しや道路側の雨戸を細くあけて夜空を見上げました。わたしも雨戸の間からおそるおそる夜空を見上げました。何本かの探照灯に照らし出されたB29。迫っていく日本の戦闘機。高射砲弾の煙と音。子どもの目でそれぞれの距離感は測りようありませんでしたが、B29はゆうゆうと東京の上空を横切っていきました。

父と母の挫折。

それからまもなく、母と子どもたち（わたしと妹）は父方の実家がある群馬県の農

村に疎開することになりました。父の実家近くで借家暮らしをはじめてほどなく、東京大空襲で父の工場は焼失し職人たちは散っていきました。東京での父の長年の労苦は跡かたもなくなり、都会育ちの母は暮らしの基盤を丸ごと失いました。

疎開先での暮らし。

榛名おろしの空っ風、八幡さまの杜と杉の並木、信越線の細く長い線路、春風と疾風のようなふたりの女先生、可愛い同級生、ドドメ（桑の実）、モモの摘果、ウメのひこばえ、道祖神の火、「鐘の鳴る丘」、流し針のウナギ、田んぼのヒル、ぶっちめのスズメ・・・。

赤い兎の目の記憶。

ある日、家の壁に寄り添って小さな兎小屋ができました。妹が求めたものだったのですが、摘んできた草の束を扉を開いて放ると、奥から兎が跳んで出てくる。赤い目でじっとこちらを見つめてから草を食べました。危険を察知する大きな耳と跳んで逃げる後ろ足。戦うべき機能をもたない兎。ぴくぴく動く鼻とじっと見つめる赤い目が記憶に残りました。ある日、草の束をもって小屋にいくと、もうそこに兎はいませんでした。死んだのか逃げたのか他の動物に襲われたのかはわかりませんが、そのまますぐに忘れしました。

「雪中高士」のように。

昭和二五（一九五〇）年、戦禍の残る東京に戻りました。その後借りていた家は朽ちましたが、わたしが植えたウメのひこばえは老樹のたたずまいをして立っていると聞きました。わたしもあれから六〇年余を都会で過ごして、いま此処に立っています。願わくば親木がそうであったように、冬の野に「雪中高士」として立ち、幾輪かの香りのいい花をつけていてほしいものです。（『続 頑張って生きよう！ ご同輩』高連協編 二〇一四年四月八日・博文館新社より）。

壮心を支える指針「老中八策」

明治維新の前夜、坂本龍馬（三三歳）が上洛のため長崎から出帆した土佐藩の藩船「夕顔丸」の船中で、同藩の後藤象二郎に示したのが新しい国家体制にかんする八策でした。「船中八策」と呼ばれます。およそ一五〇年前の一八六七年、明治維新の国家構想の先駆けとなった「船中八策」に因んで暮年の壮心を支える指針としてここに示すのが「老中八策」です。ただしこれは国家の大業ではなく、「寿終正寝」をむかえるために一人ひとりの高齢者が努めて残す小業のため。ここまで論じてきたさまざまな課題を整理して八策としたものです。ひとつずつ、ひとつでも納得できれば口ずさんでみてください。

尊厳ある人生を送る指針「老中八策」

六〇歳から三〇年十の高年期を他力依存ではなく過ごすため「自立意識」を確立中
六五歳から「引退余生」と決めないで互助・共助につとめて「現役長生」を実現中
培ってきた知識・技術を活かし円熟期の暮らしを豊かにする「優れモノ」を制作中
体（↓病気）・志（↓認知症）・行（↓介護）三元の配慮で「包括ケア」を体現中
青少年（〃三〇）中年（〃六〇）高年（〃九〇＋）で「三世代平等社会」を創出中
自己目標やみんなの課題の解決策を頼り合える人たちと「つどいの場所」で談議中
まちの協議体による支え合いの現場で「地域共生社会（生活圏）」づくりに参加中
各界で活動している仲間と成果を語り合って「水玉模様のような会」同士を連携中

人に知られることがなくとも、国連が提唱する国際的指針である「高齢者五原則」
を活かして暮らすことで、国際的な活動に参加していることとなります。ここに「八
策」を掲げていますが、すべてをというのではなく、ひとつずつ、ひとつでも実現
に参加するなら、それは史上初の「日本長寿社会」（三世代平等社会）の形成に参加
していることになると確信いたします。

#